



目次

<FD合宿研修会特集>

1. FD合宿研修会の目的
2. 授業評価アンケート：多面的分析とディスカッション
3. 授業評価アンケートの見直し案
4. 学生の立場から見た授業評価アンケート
5. 実践的「知」の具現化に向けてーカリキュラム・マップ作成実習ー
6. FD合宿研修会参加者アンケート抜粋
7. 大学教育学会第33回大会ラウンドテーブル「学生とともに進めるFD」
8. FDミニシンポジウムのお知らせ

FD合宿研修会の目的

FD推進部 物部博文

本年度のFD合宿研修会も、「学内の人的資源を発掘し、ファカルティ・デベロッパー (FDer) の役割を担うリーダーの育成を目指す。」ことを目的として、平成23年8月30日(火)から31日(水)にかけて八王子セミナーハウスにおいて実施した。

平成23年度におけるFD推進部の重点項目である「授業評価アンケートの抜本的な見直し」と「カリキュラム・マップの作成に向けて」を2つの柱として今回の合宿研修会を実施した。特に本年度の研修会は9月15日のカリキュラム・マップ作成会の開催を直前に控えて、その推進役である実質的なFDerを養成するという、極めて実務

的な側面を含む研修会であった。また、授業評価アンケート、カリキュラム・マップが相互に関連しながら横浜国立大学の教育の質の向上を目指すとりかかりとしての意味もあった。

さらに、学生FDスタッフが学生の視点で参加したのも新鮮であった。

27名の教職員の参加者に加え、3名の学生FDスタッフ、溝口周二理事、高木まさき大学教育総合センター長が参加するなか、理事のあいさつ、それに続く上野誠也部門長の趣旨説明によってはじまった合宿は、終始なごやかな雰囲気の中で進められ、参加者が各テーマ対して真摯に取り組む姿が印象的であった。

<p><研修日程></p> <p>8月30日(火)</p> <p>挨拶：理事(教育担当) 溝口 周二 FD推進部門長 上野 誠也</p> <p>テーマ：授業評価アンケートの抜本的見直し</p> <p>I-①「授業評価アンケートの多面的分析」※ 大学院工学研究院 竹村 泰司</p> <p>※平成 22 年度学内重点化競争的経費事業 共同研究者 森下 信、鈴木 和也、細田 暁、武田 淳</p> <p>I-②「授業評価アンケートの見直し案」 FD 推進部 安野 舞子</p> <p>I-③「学生から見た授業評価アンケート」 学生 FD グループ</p> <p>質疑応答</p> <p>I-④：グループディスカッション・全体討論</p>	<p>8月31日(水)</p> <p>テーマ：カリキュラム・マップの作成に向けて</p> <p>II-①「カリキュラム・マップの構築に向けて」 FD 推進部門長 上野 誠也</p> <p>II-②「学部におけるカリキュラム・マップの当てはめ作業」 (ワーク)</p> <p>II-③「カリキュラム・マップの活用ビジョン」 FD 推進部門長 上野 誠也</p> <p>II-④「学部におけるカリキュラム・マップの相互評価」 (ワーク)</p> <p>閉会</p>
--	--

授業評価アンケート：多面的分析とディスカッション

FD 推進部／工学研究院 眞田一志

FD 合宿研修会の1日目は、以下の4つのプログラムで構成された。

- 1) 「授業評価アンケートの多面的な分析」(竹村教授)
- 2) 「授業評価アンケートの見直し案」(FD 推進部授業改善 WG 安野講師)
- 3) 「学生の立場から見た授業評価アンケート」(学生 FD グループ)
- 4) グループディスカッション・全体討論

本稿では、1)「授業評価アンケートの多面的分析」と4)「グループディスカッション・全体討論」について報告する。

ちなみに、会場の八王子セミナーハウスは JR 八王子駅からバスで約 20 分のところにあり、宿泊施設や食堂を備えた研修施設である。本館は、図 1 に示すようにユニークな建築で、とても印象的であった。



図 1 八王子セミナーハウス本館

1. 授業評価アンケートの多面的な分析

竹村教授より、平成 22 年度学内重点化競争的経費によって工学部で実施された事業の成果が紹介された(図 2)。講演内容の要旨を紹介する。



図 2 「授業評価アンケートの多面的分析」

1.1 学生の意識

学生は、授業評価アンケートに対してさまざまな意見を持っている。下記の「」内の文言は、竹村教授が担当された工学部 2 年次専門科目の受講生に対して、2010 年度前期に聴取した意見であり、プレゼン資料から抜粋して示す。

a) 結果の反映

「授業評価アンケートが現在のような扱い方をされていると授業に反映されづらいと思う」「生徒の事や、授業の事をよく考えている先生ほど、アンケート内容をよく気にしてくれていて、逆に、そうでない先生ほどアンケートの意見が反映されない気がする」「学生が余りよくない評価をしているにもかかわらず、講義の進め方やデモンストレーションに改善の見られない教員がいる」「アンケートの結果によって、授業の欠点が改善されない場合が多いと思う」「アンケートが何に生かされているのかを具体的に知りたい」「ちゃんと反映されているのかわからないので、真剣に書く気がおきない」

アンケート結果が具体的に何に反映されているか、不明確であるという指摘である。

b) 結果の公表

「アンケート結果がわかると良いと思う」「結果を知りたい、無回答の欄が欲しい」「講義を選択する際に前年度の授業評価を参考にして、あまり評価の悪い先生の講義を避けたい」

アンケート協力者に対する結果の提示が望ましいという考え方もあり、教員選択制などの方法を含め検討してもよいのではないかと。ただし、公開には課題もある。

c) 意義

「先生によっては、全く相手にしていない人もいたので真面目に書く気が失せる」「授業中に片手間に書かされるので、時間がなくすべて「3」等に行っている人がほとんどです」「講義最終日に実施されてもまじめに答える気がおきない」「匿名だから適当に答えてしまう」「アンケートによって先生の授業がよくなるなら、これからも続けた方がよい」「授業評価によって改善されるのは次の代からなので、あまり意味がなく、・・・」

アンケートの意義や教員の意識に疑問をもち、実施時期にも不満を持ちながらも、授業の改善につながるならアンケートの継続を支持している。

d) 意見・要望

「設問数が少し多い気がする」「質問の差がよくわからないのがあったりする」「意味のわからない項目があったりする」「あいまいな問いは答えに困る」「最後の講義でシラバスのことを聞かれても覚えていない」

アンケートの質問項目は、教員としてはかなりの労力を割き、繰り返し議論してきた。しかし、教員本位でありすぎ、学生の目線に立っていないため、学生にはよく理解されていないのが実情のようである。意味のある回答がなされているか危惧される。シラバスについては、もっともな指摘であろう。

1.2 回答パターン

ご承知の通りアンケートの回答は、短冊形のマークシートに 1 から 4 の 4 段階評価で回答するものである (図 3)。この各質問に対して学生はどれだけ真剣に考えて、マークしているであろうか? マークシートの 1 から 4 の回答パターンについて分析した。Q4 から Q13 までの 10 問の中

で、回答番号を変更した回数を調べた。その結果、1回もマークされた番号が変わっていない回答が全体の26.9%もあった。すなわち、アンケート結果の1/4は、すべて同じ番号にマークしたものだ。たとえば、すべて3にマークしたような回答が多数含まれていることがわかった。このような不自然な回答は、集計時に取り除く必要がある。しかし、問題はより重大であり、現行のアンケートのあり方自体を見直す必要があることを示唆している。

以下Q4からQ14には、下の4段階評価に従って最も適切だと思う番号を下の選択肢欄から1つ選んでください。
4.非常にそう思う 3.ややそう思う 2.あまりそう思わない 1.まったくそう思わない

【授業の進め方および内容について】

Q4 板書や資料提示・デモンストレーション等は良かったですか。	4	3	2	1
Q5 授業の理解に役立つ教科書・参考資料・資料などが用意されましたか。	4	3	2	1
Q6 シラバスの記述は、分かりやすかったですか。	4	3	2	1
Q7 教員は質問やコメントなど、学生の声を聞く機会を設けましたか。	4	3	2	1
Q8 授業内容についてどの程度理解できましたか。	4	3	2	1
【総合評価】				
Q9 この授業で考え方・知識・技術などが向上したと思いますか。	4	3	2	1
Q10 総合的にこの授業に満足しましたか。	4	3	2	1
【個別質問】以下の4問は個別質問です。教員から指示があるときは回答してください。				
Q11	4	3	2	1
Q12	4	3	2	1
Q13	4	3	2	1

図3 アンケート用紙（抜粋）

1.3 相関分析

アンケート結果として、各項目の平均点と自由記述など一部の情報が教員に返されている。そもそも、アンケート結果の膨大な生データが存在するので、これを分析することでより多くのことがわかる。

たとえば、授業への出席状況と時間外学修の間の相関分析を行った結果、“授業に出席しないが、時間外学修をした学生はいない”、ことがわかった。それ以外にも、教員の意欲と学生の満足度の相関など、アンケート結果のデータをより多面的に分析し、今後の運営、改善に意味のある結果を導く努力が必要である。

1.4 論点

最後に、以下の4つの論点が示唆された。

- 1) 記名か無記名か
- 2) 回答項目は多いか
- 3) シラバスを覚えていない
- 4) その他

これらの論点は、以降のプログラムでも繰り返し指摘され、議論されることとなる。

現行のアンケートは無記名で行われているが、責任ある回答を求めるには記名式が望ましい、と考える教員もいるであろう。しかし、学生は記名式には強い抵抗感を持っており、具体的には成績評価に関係づけられることを恐れている。

その他の論点として、米国のある大学では、ベスト・ティーチャー賞は学生の運営で選ぶようになっていることなどが紹介された。

1.5 データベースとの連携

授業評価アンケートに関連して、データベースと連携したアンケートの活用方法について紹介された。

1) 活用

教員への質問や教員からの回答を閲覧できるようにする。アンケート結果がわかり、これから履修する学生にとっては履修登録の参考になる。

2) 学生ポートフォリオ

キャリアデザインファイルのWEB化。学生カルテとも呼ばれる。

3) 前学期の不合格科目の振り返り

不合格となった科目について、学生がその理由、反省などをWEBに入力するようなシステムも考えられる。担任が面接をしてはじめて新学期の履修登録ができるようにしている大学もあるが、課題もある。

4) 学務情報システムの改善

過去の講義の履修者、成績を見ることができないので、可能にして欲しい。これができるように

なれば、例えば業績調査票への受講者数などの記入に利用できる。

5) 教育研究活動データベース

学務情報システムから担当講義などの情報をリンクさせることを計画中である。これにより教育研究活動データベースへの担当講義などの入力も省略できる。

2. グループディスカッション・全体討論

冒頭に記載したプログラムの 1)から 3)をふまえて、参加者が三班に分かれて「授業評価アンケートに関する事業改善計画」について議論した(図 4)。その結果を、参加者全体に対してプレゼンし、議論を深めた。



図 4 グループディスカッション

1日目のFD合宿研修会には、理事、各学部参加教員、FD推進部委員、学生FDスタッフ、事務職員が参加した。3つに班分けされ、「授業評価の改善案」についてグループディスカッションを行った。教員、職員、学生の混成グループでの議論はどうなることかと思っただが、遠慮することなく活発な議論がおこなわれた。学生FDスタッフの理路整然とした議論には、大変感心した。グループディスカッションの時間は40分ほどであったが、あっという間であった。このようなメンバー構成で議論をした経験がなく、非常に参考になった。

私の参加した班の議論では、「記名・無記名」に関する議論と、「授業改善」が明確になるように、との意見が印象的であった。

改善案を記入した用紙を実体投影機で映写し、各グループ代表がプレゼンして、質疑応答を行った。以下は、その用紙に記載された改善案をそのまま示す。

1) グループ1

- ・シラバスに改善結果を記入する
- ・アンケートの項目を削減する
(削除する項目が例示されていた)
- ・自由記述を中心にする
- ・管理側のベンチマークと自由記述(FD改善に結びつける)を分離する
- ・卒業時、卒業後アンケートも行う

2) グループ2

- a) 実施体制の改革について
- ・改善目的の明確化+改善結果が含まれるもの→名称の変更
- b) 具体的な施策
- ・項目選択制+自由記述のアンケート
 - ・中間期に別アンケート(無記名)
 - ・期末アンケートは記名も可とし、中間期アンケートによる改善達成度も項目に含める。
 - ・教員のフィードバックは義務化する
 - ・アンケート結果の公開(教員による選択可)+シラバスとの連動

3) グループ3

- ・評価データ開示(教員向け)学籍番号あり:成績・出欠とのリンク
- ・受講態度項目をe-ポートフォリオへ移行(分離)
- ・質問内容項目の適正化:大学としての“良い授業”とのリンク
- ・評価データ開示(学生・保護者向け):コメント、回答、改善:ランクがついてもよい

各班のプレゼンが終了した後、全体について質疑応答が行われた。その中で、市場調査の経験から自由記述の意見を読解することは容易ではな

く、客観的評価のために点数による評価は欠かせないという意見が印象的であった。

3. おわりに

授業評価アンケートをテーマとした1日目のプログラムのうち、1)と4)について紹介した。会議の雰囲気を理解していただけるように、講演や議論の内容をできるだけそのまま記載した。

1日目の議論から明らかになったことは、授業評価アンケートは見直しを行う必要があることである。今回の合宿研修会の1日目の大きな成果は、授業評価アンケートの改善案を検討する方向性が得られたことであると考ええる。今後、今回の議論をふまえ、FD推進部において授業評価アンケートの改善についての検討が行われる予定である。

授業評価アンケートの見直し案

FD推進部特任講師 安野舞子

FD合宿研修会1日目のプログラム2では、「授業評価アンケートの抜本的改革」を本年度の活動重点項目に掲げるFD推進部を代表し、筆者が「授業評価アンケートの見直し案」について発表した。以下、発表の要旨を記す。

横浜国立大学における授業評価アンケートの課題

本学が抱える授業評価アンケートの課題は、ひと言で述べると、「アンケート本来の目的が機能していない」である。そもそも、「アンケート本来の目的」とは何か――。『学生による授業評価報告書ー平成14年度(2002)ー』には次のように記されている：

学生による授業評価は、学生にとっては授業への参加意識を高め自分の学習態度を見直す契機となり、教官にとっては学生の反応を通して理解度を把握し、授業改善に役立てることができる。したがってこのアンケートを有効に活用することが、教官および学生の意識改革へとつながり、本アンケートが目指すところとなる。

(p.1、下線は筆者)

上記引用に照らし合わせてみれば、本学における授業評価アンケートの現状は、残念ながら学生

にとっては「授業への参加意識を高め自分の学習態度を見直す契機」とはなり得ていないし、教官にとっては「授業改善に役立てること」がどこまで実現できているか疑わしい。授業評価アンケートを「有効に活用」し、本来の実施目的を達成するためには、少なくとも以下6項目にわたっての見直しが急務と考える。

【見直し案1】 Webシステムを利用したアンケートの実施と教員への結果の即時返却

本年6月(学期中間期)、試行的に行ったWebによる授業評価アンケートの回答率の結果から、アンケートの実施を全面的にWebに移行するのは慎重にならざるを得ないが、Webを利用することによって得られる利点(教員への結果の即時返却)があるのも事実である。そこで、希望する教員に対し、学期の中間期(第6~8週目頃)にWebでアンケートを行えるようにし、アンケート結果を後半の授業の改善に活かしてもらえるシステムを構築する。ただし、学期末に一斉に行うアンケートについては、従来のままマークシート形式で行うか、Webに移行するかは更なる検討が必要である。

【見直し案2】 Web システムを利用したアンケート結果の学生への公開

- ・回答した学生（＝当該授業を履修した学生）にアンケートの結果を公開する：Web システムで、自分が履修した科目名をクリックすると閲覧できるようにする。
- ・回答した以外の学生も、今後の履修選択の参考として、アンケート結果と教員のフィードバック（見直し案3）を閲覧できるようにする：Web システムのシラバスと連動させる。

ただし、学生への結果の公開には不安要素があることも事実なので、「何をどれだけ公開するか」、「教員によって公開の可・不可を選択できるようにするか」、「そもそも、学生に結果を公開しても何ら問題とならないような質問項目とは何か」等について検討する必要がある。

【見直し案3】 Web システムを利用した教員から学生へのフィードバック、および自己点検

アンケート結果に対する教員のコメントを Web で入力し、履修した学生や今後履修を希望／検討する学生が閲覧できるようにする。学生からの改善要求に対しては、理由を付けて「できない」と述べたり、必要に応じて反論することも大切。

このフィードバック作業をもって、従来の「自己点検票」の作成に替える。

【見直し案4】 記名制（学籍番号の記入）の導入

以下の理由から、学籍番号の記入を導入する：

- 1) 匿名制に起因する「適当な回答」、「(自由記述での) 誹謗中傷」を回避し、責任をもって回答してもらう。
 - 2) 成績との関連など分析を行うことで、組織的な教育改善に資するデータを入手する。
- ただし、教員側の「責任」として、回答結果に

対しフィードバックをすること（見直し案3）、および成績に響くことを恐れ、「書きたいことが書けない」学生も出てくるので、「成績には一切影響はない」と強調することを忘れない。

【見直し案5】 アンケートの名称の変更

「アンケートは、学生に授業を“評価”してもらうことが目的ではない」ことに鑑み、「学生による授業評価アンケート」という現在の名称を、本来の目的である「授業改善のためのアンケート」であることが明確に分かる名称に変更する（他大学の名称例：「学生による授業改善アンケート」（山形大学）、「授業改善のための学生アンケート」（福島大学））。

【見直し案6】 質問項目の内容・構成の変更

従来の質問項目の内容や構成を、次ページのように変更する（合宿では2つの案を提示したが、紙幅の関係上、本稿ではその内の一つのみ紹介する）。

ただし、ここに提示するのはあくまでも「案」であり、質問項目数やその内容、構成の仕方などは、今後も議論を重ねて練り上げていく。

まとめ

本発表では、FD 推進部からの見直し案として、具体的に6項目にわたり案を提示した。しかし、授業評価アンケートの企画・立案を行うのはFD 推進部会の中の「授業改善ワーキング・グループ（WG）」であり、当 WG で検討した内容をFD 推進部会で審議にかけて最終的に決定する。従って、本発表の内容を受けてプロラムの最後に行われるグループ・ディスカッションおよび全体討論で参加者に活発にご議論いただき、そこで議論された内容を授業改善 WG に持ち帰り、更に検討を重ね、来年度から“抜本的に改革された”新たなアンケートを実施して参りたい。

学生の立場から見た授業評価アンケート

学生FDグループ

FD 合宿研修会で学生 FD グループから授業評価アンケートに対する発表がありました。発表に用いた資料は分かりやすくまとめてありましたので、そのまま掲載することにしました。(FD 推進部)

0. はじめに

「授業評価アンケート」に関する「学生アンケート」実施（実施期間 2011 年 8 月 9 日～12 日）

* 横国生約 980 名に依頼、回答率 2.5%…

そもそも「授業評価アンケート」への関心が低い？

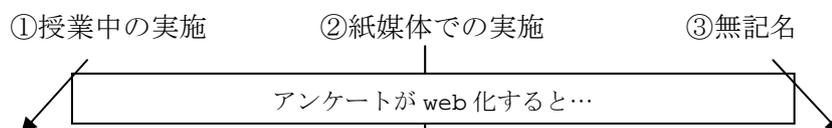
* 「学生アンケート」自由記述欄より

形骸化しているならやめるべき。

何がやりたいのかわからない。

1. 現在の「授業評価アンケート」のよい点

【履修者全員への回答の機会を提供していること】



①回答が授業時間外になる。

③ログインが必要な為、実質記名制になる。

②PC に向かう手間が生じる。レポート・テスト時期に大学内のパソコン及びパソコン回線が混雑する。

現在のよいところが3つとも失われてしまうことは勿体無い！

○記名に関して

* 「学生アンケート」 Q. 4. もし「授業評価アンケート」が記名制になったら、どのように感じますか？

①回答に責任が持てる	8%	②特に何も感じない	16%
③回答するが、抵抗を感じる	76%	④回答しない	0%

* 「学生アンケート」自由記述欄より

アンケート自体が成績評価の参考にされることあるという噂がある。



建設的な意見として書く・受け止めるという認識が学生・教員双方に浸透するまでは、無記名制を維持して頂きたいと思います。

2. 「授業評価アンケート」の問題点

* 「学生アンケート」 Q. 1. 現在の「授業評価アンケート」は授業改善に役立っていると思いますか？

- ①役立っていると思う 24%
- ②役立っていないと思う 76% . . . 4年生回答者13人中12人

問題点① 数値のみの回答——本当に改善に活かせるのか。

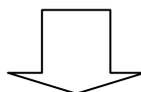
(例) 「Q2この授業にはどの程度出席しましたか」

「Q4板書や資料提示・デモンストレーション等はよかったですか。」

→特に回答選択肢の「1」や「2」を選んだ場合は内容・理由記述を必須にするなどが必要。

* 「学生アンケート」 Q5. 「授業評価アンケート」の自由記述欄への記入はしていますか？

- ①している 8%
- ②特別に書くことがあるときは記入している 36%
- ③教員から指示があったときは記入している 20%
- ④していない 36%



自由記述欄が一番具体的な改善に生かせる重要項目です。

- ・ 選択項目にも理由などの記入欄を設けること、
- ・ 最後の自由記述欄は「感想欄」と名称を変更するなど
気軽に書けるようにすること、
- ・ 教授から学生に記入を呼びかけること を提案します。

問題点② 全授業でのアンケート実施

——少人数、特に履修者一人のゼミにもアンケートが必要なのか。

* 「学生アンケート」自由記述欄より

私の所属する専攻人数がかなり少ない方なので、なんとなく書きにくさがある。
ゼミは一人なので特に書きにくい。



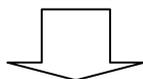
アンケートは授業改善の手段

人数や授業の質によって、アンケートが授業改善に適した手段でない場合、実施しないという選択もあるはずですが。ただ形式的に実施することは形骸化を招きます。

問題点③ アンケート回答者である学生への説明不足

* 「学生アンケート」自由記述欄より

誰が、いつ、アンケートのどの部分を見て、アンケートがどのように反映させるのかを、アンケートに答える人に提示する必要があると思う。



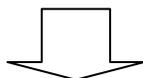
アンケートの意義や扱われ方の不明瞭さは、学生の誠意ある回答につながらない。

- ・全教師がきちんと説明するくらいの措置が必要。
- ・実施主体者からの掲示板・HP・学内メールなどを利用した説明も有効。
- ・学生FDグループも学生が取り組みやすくするための呼びかけをしていきたい。

問題点④ アンケートの評価の結果に重みがない。

* 「学生アンケート」自由記述欄より

明らかに全体からの評価が悪い教員に関しては、教授会などで話し合ってもらいたい。特に非常勤の先生に関して。学生は高い授業料を収めているのだから、大学側も全力で授業の質の向上に努めてほしい。



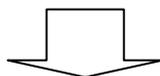
問題のある授業が改善されずに繰り返されていることは大学の体制・質の問題

アンケート結果を教授に渡すだけでなく、具体的な改善につなげるための取り組みをする必要があります。

問題点⑤ 学生側にメリットが感じられない。

* 「学生アンケート」自由記述欄より

解答するのは面倒くさいのに、学生側にメリットが特に無いのが癪。
結果を公表して、次年度の時間割りを決めるときの参考くらいにはさせてもらいたい。



本来、授業改善は学生のためでもあるはずです。

- ・アンケートを取って、その結果や具体的な改善を見せることが必要。
- ・メリットがあれば、学生はより真剣にアンケートに取り組むようになるでしょう。



私たちはアンケート結果の公開を求めます。

* 「学生アンケート」 Q. 2. 「授業評価アンケート」の結果を開示してほしいですか？

①してほしい 64% ②どちらでもよい32% ③しなくてよい 4%

具体的には…「シラバスへのアンケート結果掲載」、
あるいは「アンケート結果一覧が見られるページを学生FDのHP上に作成」

(内容例) 「Q9 授業内容についてどの程度理解できましたか。」→難易度として数値で表示

「Q11 総合的にこの授業に満足しましたか。」→満足度として数値で表示

「FA2: その他の要望」→要望の内容と併せて教授の回答や改善案を公開

3. 学生のもう一つの思い

- ・アンケートを活用して授業改善に努めている教授と形式的に行っている教授、双方の存在
…アンケートの善し悪しの問題とは別に、教授がアンケートを活用するか否かも問題。

* 「学生アンケート」自由記述欄より

・授業評価アンケートが役立っているかどうか(少なくともそう実感できるかどうか)は教員によって大きく差があるので、一律にどうか言いにくいです。

・学生の興味・関心を引こうと工夫をしてくださる先生方もいれば、自己満足な授業ばかりな先生もいます。自己満足で授業している先生方には、アンケートの結果はあまり関係ないのだと思っています。

・問題のある先生ほど直さない。アンケートを重要視していないと思う。講義を変える意志がみられない。



**全教授に対する「授業評価アンケート」への意識調査、
及び目的の確認が必要だと感じます。**

アンケートの目的を今一度確認し、公開を含む授業改善のための具体的な取り組みを、教授、学生が共に考えていけたらと思います。

以上



実践的「知」の具現化に向けて —カリキュラム・マップ作成実習—

FD 推進部部門長 上野誠也

1. カリキュラム・マップの作成

学位授与の方針であり卒業生の資質を表わすディプロマ・ポリシーと各授業科目との関係を示すカリキュラム・マップを平成 23 年度は全学の学科やコース単位で作成する方針である。これにより YNU initiative が掲げる学士課程の教育目標が全学の教育内容に保証されていることを見える形にすることができる。教育の質の保証を外部にも公開することが目的となる。カリキュラム・マップの作成には全学教務厚生部会が担当するが、当 FD 推進部は外部情報の提供や各種講習会の開催などで協力している。

平成 23 年度の FD 合宿研修会 2 日目は、カリキュラム・マップ作成に充てた。学科の代表教務委員らが中心に約 30 名参加した。教育担当理事の溝口周二副学長も経営学部教員として参加し、マップの作成作業に手を動かしていた。

FD 合宿研修会におけるカリキュラム・マップ作成実習には 3 つの目的があった。

- 1) カリキュラム・マップ作成リーダーを育成する。
- 2) 各学科に適したカリキュラム・マップを提案する。
- 3) 信頼性のあるカリキュラム・マップの作成手順を確認する。

合宿の約 2 週間後の 9 月 15 日には、全学のカリキュラム・マップ作成担当者ら約 50 名が一堂に会して作業を行うことを企画していた。今回はそのためのリーダー育成とカリキュラム・マップの形態や作成手順の確認を行なった。

2. 実践的「知」

YNU initiative が掲げる教育目標は、4 項目からなる実践的「知」で集約されている。

- ✓ 知識・教養
- ✓ 思考力
- ✓ コミュニケーション能力
- ✓ 倫理観・責任感

各学部は、これらの実践的「知」をそれぞれの学部に合わせて表現し、10 項目前後のディプロマ・ポリシーを YNU initiative に宣言している。今回は学部で設定されたディプロマ・ポリシーと授業科目の関係を示すカリキュラム・マップを作成し、実践的「知」が保証されていることを示した。

ミニコラム 実践的「知」について

YNU initiative に掲げられた 4 つの実践的「知」は、中央教育審議会が平成 20 年に答申した「学士課程教育の構築に向けて」で提言されている学位授与の参考指針にほぼ同等の項目が挙げられている。一般的な項目であるが、誰あるいは何に対しての「知」であるかを考えると理解しやすいと参加者からコメントがあったので紹介する。

- ✓ 知識・教養 ⇒ 知恵に対して
- ✓ 思考力 ⇒ 自分に対して
- ✓ コミュニケーション能力 ⇒ 他人に対して
- ✓ 倫理観・責任感 ⇒ 社会に対して

3. 誰のために？

誰のためにカリキュラム・マップを作成するのだろうか？答は3つある。

1) 学科のために

作成したカリキュラム・マップからは、学科やコース、課程での教育の質が保証されているかどうか分かる。従って、不完全なカリキュラムを実施している学科等は、カリキュラム改訂の指針を得ることができる。

2) 教員のために

作成したカリキュラム・マップからは、各授業科目が担当する「知」が明確になる。従って、授業改善の方向性が示され、学生の「知」を伸ばすことができる。

3) 学生のために

作成したカリキュラム・マップからは、自らの「知」の習得が明確になる。従って、自分の「知」の現状が把握でき、卒業までの明確な指針を持つことができ、勉学意欲が増大する。



写真1 カリキュラム・マップ作成風景

4. カリキュラム・マップの品質保証

カリキュラム・マップの作成作業は、授業科目とディプロマ・ポリシーの関係の判断基準を統一するために、一人で行った。しかし、完成したカリキュラム・マップの信頼性を保証するためには第三者による検証が必要である。

カリキュラム・マップは、①授業科目の到達目



写真2 カリキュラム・マップ作成風景

標、②ディプロマ・ポリシー、③両者の関係を示すマークの3要素で構成されている。それぞれがチェックできる図1のフローを作成し、実施した。評価を加えることで、カリキュラム・マップ自身の質も高めている。



図1 カリキュラム・マップ評価フロー

5. 反省と改善

参加者のアンケート等をもとに、カリキュラム・マップ作成手順の改善を行った。表1にアンケートのコメントとそれに関する改善策を示す。実作業を行ってみないと分からないコメントも多くあり、有意義であった。これを受けて、図2に示すように作成作業手順を見直した。完全な策が示されていない指摘もあるが、これにより合宿研修会の三番目の目的が達成できた。

表1 アンケートのコメントと改善策
(DP:ディプロマ・ポリシー)

コメント	改善策
シラバスの到達目標の書き方が統一されていない。	各部局でFDミニシンポジウムを開催します。
配付された表に同一科目名の授業科目が含まれていた。	作業の開始時に、授業科目の整理を行うようにします。
紙へ記入するのではなく、パソコン上で作業はできないか。	パソコンでカリキュラム・マップ作成作業ができるようにします。
一人が行う作業量が多いので、何らかの改善策は無いのか。	判断基準の統一性を保ちつつ、分割できる手順を考えます。
評価のチェックは、カリキュラム・マップ上にできないか。	カリキュラム・マップのフォーマットを改訂します。
第三者による評価は理由を記述できるようにしてほしい。	カリキュラム・マップのフォーマットを改訂します。
他部局の者には到達目標に記載された用語が分からない。	部局内の他学科に所属の方が評価する方式に変更します。
DPの評価は教養教育科目を含めた全体で行うべきである。	全体が揃った時点で評価するように手順を変更します。

6. 今後の方針

カリキュラム・マップは今年度末までに完成させる予定である。しかし、作成の根拠となるシラバスの到達目標は、各授業科目担当者に作成を依頼している。すなわち、全教員の協力が無ければ、カリキュラム・マップは完成しないものである。あいまいな到達目標が書かれた授業科目には、その授業科目担当教員へカリキュラム・マップ作成者からシラバスの修正依頼が届くものと思われ

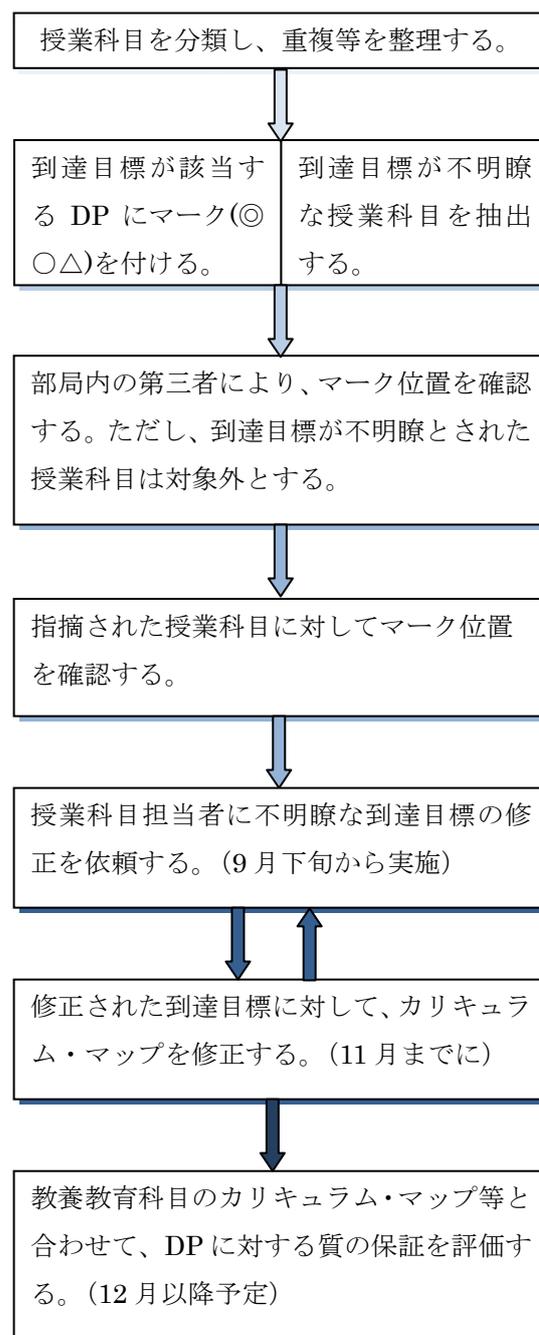


図2 改善されたカリキュラム・マップ作成と評価の手順

る。また、この機会を利用して、シラバスを見直し、次年度から到達目標が明確な記述に変更していただきたい。そして、次年度からは授業科目間の関係を図示するカリキュラム・ツリーの作成を予定している。今後も教員皆様のご協力をお願いしたい。

FD 合宿研修会参加者アンケート抜粋

FD 推進部 物部博文

FD 合宿研修会終了時に回収したアンケートは 22 名からの回答を得られた。「この合宿研修への参加は積極的ですか」の問いにやや積極的、かなり積極的と回答した参加者は、全体の 61.9% (13 名)であったのに対して、「研修が終了した現在、参加して良かったと思いますか」の問いに、そう思う、とてもそう思うと回答した参加者は 94.7% (18 名)と、参加者の 90%以上が良かったという感想を示していた。また、プログラムの内容等への評価についても多くの項目において、80%以上が、やや高い、高いと回答しており、おおむね良好な結果となった。

その一方で、自由記述をみると、今回の合宿研修会で良かった点について、「今回は特に授業評価アンケートについての 1 日目だけに参加しました。十分な成果が得られました。学生 FD スタッフの発表内容は大変参考になりました。」「評価アンケートに関して教員の意見をまとめていただく機会を作っていただいた。」「DP と自分のシラバスの関連について考えることができた。」などの感想が得られた。

また、初任の先生方からは「プログラム I ①の竹村先生の内容は大変興味深かった。授業評価アンケートの改善へのサジェスションを与えると共に、そういった内容が研究として行われている点が興味深かった。また学生の生の声を聞く機会があったのもよかった。最後に様々な学部の方と話をする機会が新任ということもあり今まで全くなかったので、いろいろな情報や刺激を受け大変良かった。」「採用 1 年目で授業評価の全般が理解できて大変良かった。」という回答が得られた。

さらには、「懇親会それにつづく 2 次会で参加された方々と有意義な情報交換ができたこと。」「他学部の先生方と密に議論することができた。」「教育改善の取り組みに対して、教務課をはじめ職員サイドも積極的に参画し「教職協働」の動きを高めていければと思っています。」等、普段接する機会の少ない他学部の教職員との意見交換や教員と職員の協働についてのコメントが得られ、今後の FD のあり方の参考にもなった。



▲合宿参加者による集合写真

大学教育学会第 33 回大会 ラウンドテーブル「学生とともに進めるFD」

FD 推進部部門長 上野誠也

1. 大学教育学会第 33 回大会

大学教育学会は、大学教育に関する研究活動の情報交換や研究成果の公表を行い、大学教育の一層の充実発展を図ることを目的としている学会である。1979 年に設立された学会であり、当時は一般教育学会という名称で大学の一般教育を対象としていた。現在は大学における教育方法や学務制度の改善などの新たな試みや課題などが毎年報告されており、全てが FD 活動に関係すると言っても過言ではない学会である。

第 33 回大会は、平成 23 年 6 月 4 日（土）と 5 日（日）に桜美林大学を会場として開催された。初日は総合テーマ「大学教育の質とは何か ―ふたたび大学のレゾンデートルを問う―」に関する基調講演と最近注目されている課題を取り上げたシンポジウムを行った。レゾンデートルとは存在意義であり、質が保証されなければ存在しなくてもよいのではという問いかけに我々は答えなければならない。質保証と FD の関係を示す講演もあり、現在横浜国大で進めているテーマに有意義であった。



図 1 桜美林大学が表紙の発表要旨集録

2. ラウンドテーブル

2 日目の午前中に過去最高の 18 件のラウンドテーブルが開催された。ラウンドテーブルは、企画者が提案するテーマの下に 3～4 名が報告し、その後に会場全体でディスカッションを行う形式の企画である。ラウンドテーブルのテーマを数件示すが、大学教育を改革する立場の人間にとっては、いずれも興味深いテーマが並んでいた。

- ・ライティング教育を基点にした学習支援と FD 活動の展開
- ・授業コンサルテーションの現状と可能性
- ・大学におけるカリキュラムの設計と実施（カリキュラム・マネージメント）―大学人の協働可能性―
- ・教育改善のための教育情報アーカイブ ―授業映像は授業改善にどう役立てられるのか―
- ・学生の理解を深める教授学習(deep project)

いずれも FD に関するテーマが取り上げられ、各大学での取組みとそれから生じた課題などの議論が繰り広げられた。本報告では、筆者が参加した「学生とともに進めるFD」について紹介する。

3. 学生とともに進めるFD

学生 FD の父と呼ばれる立命館大学の木野茂教授が企画者となり、特色ある学生 FD 活動を行っている大学が報告者として選ばれたラウンドテーブルである。昨年も同一テーマで開催されており、その時は立命館大学、追手門学院大学、法政大学社会学部、大阪大学が報告者であった。今年は、島根大学、愛知教育大学、京都文教大学そして横浜国立大学が報告者に選ばれた。いずれも学生 FD 活動が始まったばかりの大学であるが、

特色のある大学である。他大学の学生 FD 活動は良い事例であるので、本学の報告と併せて紹介する。

1) 島根大学

大学教育改善の取り組みとして行われていた「教員と学生の意見交換会」が数年前から座談会形式になり、それが発展して学生 FD 活動となった。特徴としては、大学生が直面する課題をゲーム形式で考える「クロスロード—学生生活編—」を教員と学生が協力して開発したことが挙げられる。初年次教育に相当するゲーミングツールである。

2) 愛知教育大学

ボランティア組織の「愛教大 CoNandE 委員会(愛教大こんなんでもいいんかい)」が学生 FD 活動の母体となっている。CoNandE は Committee of Non-obligation and Edutainment の略であり、委員会名で教育を義務でなく楽しむことと定義している。元気のいい学生達が、ユニークな授業を紹介する記事などを載せたパンフレット(図2)の発行や学生・教職員参加型 FD 集会「学生の声を聞く FD とは」を開催している。



図2 愛知教育大学の活動報告書

3) 京都文教大学

有志の集まりから教員(Faculty)・職員(Staff)・学生(Student)が一体となった FSD project が発足し、雑誌(図3)の発行など数々の活動を続けている。有志ではあるが、活動を行うことで学内で

の市民権を得ていると報告された。特徴的な活動は、初年次教育の自校教育であった「京都文教入門」を学生の手で聴きたい授業へと作り変えたことである。学生が選んだテーマでの学長との対談なども含まれており、本当の授業改善を実現している。



図3 京都文教大学の FSD Magazine

4) 横浜国立大学

昨年の FD ニュースレターで発足式を紹介しているが、他大学と比べると組織作りに特色がある。まず、学部推薦と公募の二本立てで学生 FD スタッフを集めたことである。学部推薦を用いている大学自体も数が少ないが、公募を併用した大学は他にない。次に、教員の FD 推進部の下部組織として位置付けていることである。ボランティア活動が多い中で、異質な存在である。報告後の質問はこの二点に集中して寄せられ、他大学の興味を中心となっている。

4. まとめ

大学の教育の質を問われ始めて、かなりの時間が経った。まだ明確な答が出ていないが、学生の視線で質保証を示す動きが出ているのは事実である。この時代の流れを理解することができる学会であった。ここで得た情報を本学の FD 活動に活かして行きたい。

FD ミニシンポジウムのお知らせ

「シラバスから教育の質保証へ」

YNU initiative の実践的「知」を保証するためにカリキュラム・マップを作成しています。その基になっているのがシラバスの到達目標です。実践的「知」を意識した書き方、学生に分かりやすい書き方を、皆様の**教授会の前**に FD 推進部が伺い、説明します。多くの先生方の参加をお願い致します。

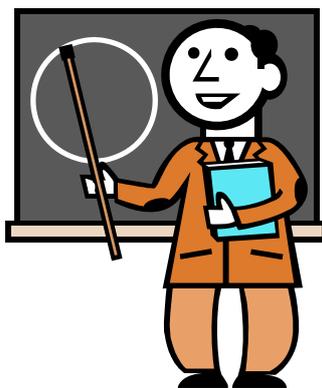
日 時： 10 月または 11 月の教授会前 30 分

場 所： 教授会の開催場所と同じ

プログラム(各 10 分)

- ・講演「実践的「知」と授業の到達目標」
- ・ミニワークショップ「到達目標の書き方」
- ・講演「カリキュラム・マップを活用する」

※ 詳細は、各部局の FD 推進部委員からお知らせします。



本誌への原稿を募集しております。また、ご意見・ご感想をお寄せください。

YNU FDニュースレター No. 17

編集／横浜国立大学 大学教育総合センターFD 推進部

作成担当：ニュースレター・ワーキンググループ

事務担当：教務課大学教育係

問合せ先：kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp

発行／平成23年10月